

## ～母校出身の教授より寄稿～

**来沖しての感想**

弘前大学大学院医学研究科腫瘍内科学講座 佐藤 温（2期生）



9月18日、金城福則先生のご厚意で第13回沖縄消化器癌懇話会に講演させて頂きました。沖縄での講演はこれで3回目になりますが、今回初めて規制なく自由な内容で参加者と語り合うことができ、とても有意義な時間を過ごせました。四半世紀を超えてずっと医療に取り組んでいるといろいろな限界に直面します。時にはへこたれて医師と言う職業を辞めようかと思うことさえあります。でも、それを救ってくれるのはやはり患者さんたちでした。自らの「いのち」がわずかしかないと知り、おおきな苦痛を抱えている患者さんらが優しいのです。当日の講演は、そんなメッセージを込めながら、理想のがん医療についてみんなで考えることができました。金城先生、参加者の皆様、あらためて感謝いたします。ありがとうございました。その際、蔵下同窓会会長に「来沖して」の感想を寄稿する機会を頂きましたので、お言葉に甘えて感じたままに書きたいと思います。

それは、夕刻の国際通りでのことです。私が学生だった頃、ここはこんなにも賑やかだったのでしょうか。当時沖縄には大型ショッピングセンターはなく、一人暮らしの学生らは休みになると沖映通りの「ダイナハ」で生活雑貨を買い物したものです。あの頃あんなに大きく感じたビルが、今は何と小さく感じる事でしょうか。一方、国際通りに立ち並ぶ店舗が何と煌びやかなことでしょうか。日が暮れてきているにもかかわらず、これほどまでに通りに人があふれている情景は私の記

憶にはありません。周囲の会話に耳を傾けると海外からの旅行者も大分多いことに気が付きました。公設市場2階の食堂もほぼ満席です。空席に案内してくれた女店主が、「お客さんはラッキーだよ。今日は雨でお客さん少ないからね。いつもはそこに並んで待っているよ。このところ大繁盛で、従業員にも賞与が出せたよ。」と満面の笑みで話してくれる。周囲をみるとどの店も従業員はみんなアジア圏の方々であることに気が付く。「やはり、お客が国際化してきたから、その対応で海外の方たちを雇っているのですか？」と質問すると、「違いますよ、募集しても日本人は一人も応募してこないよ。彼女たちがいなければ飲食業はやっていけないね。」とのこと。沖縄では仕事が不足しているものだと思い込んでいた私にとっては意外なひと言でした。

考えてみれば、私が卒業してからすでに沖縄県の人口は20数万人増加しています。一方、私の暮らす青森県はこの間15万人減少してしまいました。総務局統計局データをみれば、日本全国が人口減少している中で、沖縄県は人口増加している稀有な県です。老年人口（65歳以上）比も、青森の27.9%に対して18.4%しかありません。年少人口（1～14歳）比も全国トップで、県自体に若さとそれに伴う力があるのです。これに当時より倍以上に増えた観光客がいるのですから賑わいを感じるのも至極当然です。ついでに厚生労働省データをみると、当時沖縄県の医師の数は青森県の医師数より20%近く少なかったのに、現在は逆転して20%以上多い状況でした。なるほど、沖縄の発展はすばらしいなと思いながら帰途に着きました。今度機会がありましたら今度は東北の魅力について話したいと思います。